

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 博士学位申請論文概要

## 論 文 題 目

言語教育としての「自分の日本語」その意義と可能性  
—「日本語人生」という物語の意味—

申 請 者

鄭 京 姫

2012年7月

## 目次

第1章 「物語」の始まり	1
第1節 日本語学習者と私の「日本語人生」	1
1. 学習者の経験から生まれた「問題意識」	2
2. 教育対象としての「日本語」とは何か	4
3. 語りから得られる「方法」から「物語」へ	4
4. 人間が、人間を研究することとは何か	6
第2節 「自分の日本語」という問題設定	8
1. 「自分の日本語」とは何か	8
2. 「自分」をどう捉えるか	9
第3節 本研究の目的	10
第4節 本論文の構成	11
第2章 日本語教育におけるライフヒストリーへの接近	12
第1節 ライフヒストリー研究の位相	12
1. ライフヒストリーへの注目	12
2. ライフヒストリーをどう捉えるか	13
3. ライフストーリーなのか、ライフヒストリーなのか	14
3. 1. 日本語教育におけるライフストーリー、ライフヒストリーへの期待	14
3. 2. ライフストーリー、ライフヒストリーを巡る議論	16
第2節 「日本語ライフヒストリー」とは何か	18
1. なぜライフヒストリーでなければならないのか	18
2. 「日本語ライフヒストリー」の位置づけ	19
第3節 「日本語人生」という物語を描く	19
1. 「物語」とは何か —ナラティブ／語り／物語—	19

2. 「今—ここ」というフィールド	21
3. インタビューから物語へ	22
3. 1. 本研究におけるインタビュー観	22
3. 2. インタビューの方法	23
3. 2. 1. インタビューの形態	23
3. 2. 2. ナラティブ生成質問	24
4. 研究者倫理	25
4. 1. インフォームド・コンセント (informed consent)	26
4. 1. 1. 説明と合意	27
4. 1. 2. 語り手の選定	27
4. 1. 3. ラポール形成から信頼関係の築きへ	28
4. 2. 倫理的配慮	30
4. 2. 1. インタビューの場所	30
4. 2. 2. フィードバック	31
4. 2. 3. プライバシーの保護	31
5. インタビューのエスノグラフィー	33
5. 1. インタビューの記録	33
5. 2. フィールドノート (field notes) をつける	34
5. 3. トランスクリプト (transcript) の作成	35
6. 分析の枠組み—意味の「発見 (discovery)」へ	37
6. 1. 分析の方法	37
6. 2. 分析の観点	37
6. 2. 1. 3つの観点	37
6. 2. 2. 「可能自己」 (possible selves)	38
7. 物語の構造	39
7. 1. 物語の語り手	39
7. 1. 1. 「日本語人生」を語る14名の語り手	39
7. 1. 2. 物語の聴き手、そして語り手である私	40
7. 2. 物語をどう読んでいくか	41
7. 2. 1. 物語の構成	41

7. 2. 2. 物語を理解していくための用語の整理 .....	41
7. 2. 3. 物語の読み手は誰なのか .....	44
小括 .....	45
<b>第3章 「日本語人生」その14の物語 .....</b>	<b>47</b>
1. 〈わたしたち〉その差異の物語 .....	47
Story01 パートルさん —礼儀正しいモンゴル人として .....	48
サインバイノー！【こんにちは！】 .....	48
モンゴルのイメージ .....	50
モンゴル人は日本語がうまいね .....	52
外国人らしくない外国人であるため .....	54
名前を言わなければ誰にも気づかれない .....	59
モンゴル人としての「自分らしさ」 .....	62
そうありたくない自分—排除されたくない自分 .....	64
Story02 アキラ君 —日本人らしい日本語が話せない日本人である僕 .....	68
日本人でもいいですか .....	68
アメリカで生まれたからといってバイリンガルになるわけではない .....	69
同時に生きる二言語の世界 .....	73
母親への思い .....	76
日系人の歴史を知る .....	77
日本人らしくない日本語を話す僕 .....	80
日本人らしさとは何か .....	84
「日本人であるわたし」から「日系人としてのわたし」 .....	86
Story03 真珠さん —〈日本人〉にならなければならなかった「わたし」 .....	89
失われた5年を振り返りたい .....	89
〈non-no先生〉を思い出して .....	90
日本語のデビューの日 .....	92
日本語学校と日本語の学習 .....	93
5年間の「わたし」を語る .....	96

外国人になった「わたし」	98
日本人になっていく「わたし」	100
日本人を語る「わたし」	102
自分に対する評価	103
失われた5年の意味を探して	104
5年後の再会	106
Story04 ミロさん —初めて「ガイコクジン」になった僕の物語	109
僕の「日本語人生」は特別です	109
ガイコクジンになる経験	110
日本人の友達がほしい	112
「肯定的な同化」「否定的な同化」	114
「同化」していく努力	117
みんなと同じである自分、唯一である自分	121
僕を掻き立てる日本語	122
僕が考える日本語	124
2. 「わたしの日本語」その変化の物語	126
Story05 トドイさん —〈運命〉の出会いから	127
「日本語」という〈運命〉の選択	127
がむしゃらに日本語を勉強する	128
最高の日本語	131
定型化しているわたし	133
二分化されていくわたし	135
Story06 純 —「外国語」から「自分の日本語」へ	138
純と呼んでください	138
日本語は第4番目の外国語	139
純の日本語、いろいろあります	142
日本語に意味を持たせていく	144
わたしたちの正しさ、日本人の正しさ	146
覚える日本語から、感じる日本語へ	149

気づきから本質的な思考へ	151
自分らしい言葉のスタイルで生きる	153
Story07 BLUE さん— 80%の日本語で生きる僕の物語	158
再び、「日本語人生」を語る	158
僕が話せる言語	159
のりピー語を勉強しよう	161
日本語の勉強	162
場面と状況に合う日本語	166
80%の意味	168
「自分らしさ」を表現していく日本語への気づき	170
Story08 エミさん —日本語が上手になりたかったわたしの物語	174
日本語が上手になりたいです	174
日本語・難しい・上手になる・壁	176
自分の日本語って何？	178
「日本語」観の変化と揺れ	182
「日本語が上手になること」とは何か	183
日本語が上手になったわたし	187
「自分の居場所」とは何か	189
3. 「母語」「母国語」「外国語」を巡る物語	190
Story09 コウさん —そのどれもわたしのものではない言葉	191
予期せぬインタビュー	191
コウさんの生い立ち	192
朝鮮族学校から漢族の学校へ	194
「外国語」である「日本語」と「英語」	196
「母語」「母国語」「外国語」を巡る言語意識	197
自分の言語に対する評価	200
Story10 秋さん —意味のあることばで生きる	202
世の中にこんなに単純な言語もあるんだ	202
日本語は自分のいいところを見せられる	203

複数の言語への気づき .....	204
「朝鮮語」「中国語」「日本語」に役割を付与する .....	206
韓国語—中国語—日本語を通じて感じる自分らしさ .....	209
意味のある言葉で生きること .....	210
Story11 愛さん —「母語」だけがわたしの言語 .....	212
わたしは韓国人です .....	212
中国朝鮮族という括り .....	213
하얼빈〔ハルビン〕 .....	214
どのような言語生活を送ってきたのか .....	215
中国人ですか、韓国人ですか .....	217
〈道具〉と〈毒〉である言語 .....	219
4. わたしを生きる「ことば」の物語 .....	222
Story12 ジン君 —自分らしく生きるためのことば .....	223
アメリカで生まれ、複数の言語を持っている「わたし」 .....	223
韓国人としての「わたし」 .....	224
帰国生としての「わたし」 .....	226
「わたし」を支える言語 .....	228
日本語で感じる「わたし」 .....	229
さまざまな自分らしさ .....	231
わたしはどういう人でありたいか .....	233
「こうであるわたし」から「そうありたいわたしへ」 .....	235
Story13 花子 —「そうありたい自分」への旅 .....	237
キラさんはなぜ花子になったか .....	237
花子は日本にやって来た .....	238
毎日大盛り食べて、毎日〈これ料理〉食べて .....	240
ちゃんとした日本語 .....	242
日本語学校の生活 .....	244
日本人のものじゃない、自分のものでもある日本語 .....	246
「アメリカ人らしい英語」「日本人らしい日本語」「自分らしい日本語」 .....	247

「こうである自分」から「そうありたい自分」へ	249
そして、もう一つの大切なことば—関西弁	251
ことばのセンスがある人を目指して	253
Story14 シホさん —〈普通の人〉として生きるわたし	255
シホさんとの出会い	255
〈夢の和歌〉を詠う	256
「日常語」と「教科書語」	257
日本語は外国語ではない	260
忘れ去られた言語	262
歩み寄ることば	264
普通のデンマーク人になりたい	266
普通の人であるシホさん	268
トポフィリア (topophilia)	270
小括	272
<b>第4章「日本語人生」で語られた「自分の日本語」の意味</b>	<b>273</b>
第1節 〈わたしたち〉という語られ方が語る意味	273
1. なぜ〈わたしたち〉を語るのか	273
2. 「差異」を持ったままの〈わたしたち〉	274
3. 序列化していく〈わたしたち〉	276
4. 「自分」と「現実」のせめぎ合い	278
5. 本質化していく〈わたしたち〉	279
6. 「同化」と「排除」の対象	280
7. 「差異」と「差別」の構造	283
第2節 〈わたしたち〉の日本語	285
1. 二分法により説明される「日本語」	285
1. 1. 二分化されていく日本語の諸相	285
1. 2. 二分化された日本語の問題	287



2. 「日本人らしい日本語」の内実	288
2. 1. 「日本人らしさ」の構造	288
2. 2. 「日本人らしさ」はどのようにして可能になっているか	289
3. 日本語教育における思想の問題	291
3. 1. 日本語教育におけるコミュニケーション能力への期待	291
3. 2. 期待に隠された「期待」	293
3. 3. 日本語が上手になりたい、その「常識」を巡って	294
3. 4. その「常識」は誰によって維持生産・維持されるのか	296
4. 〈わたしたち〉を乗り越えるためには	298
第3節 「自分の日本語」とはいかなるものなのか	298
1. 混在している「自分の日本語」	298
2. 自分のものになる「日本語」	300
2. 1. 「日本語」を自分のものにしていく工夫	300
2. 2. 自分のものにする過程で感じる「日本語」	303
2. 2. 1. 自分によって「表現」「表出」することの喜び	303
2. 2. 2. 「自分」の多様性への気づき	305
2. 3. 可能性につながる成長の実感	306
2. 4. 自分のものになることとはどういうことか	308
3. 「感覚」「気づき」から、「自分の日本語」へ	308
3. 1. 言語に対する気づきから「本質的な思考」へ	308
3. 2. 自己評価につながる言語能力に対する気づき	310
4. 自分にとって「意味のあることば」	313
4. 1. 自分を掻き立てる「ことば」	314
4. 2. 自分のものにする工夫と過程における「正しい日本語」	314
4. 3. わたしと他者をつなぐ「ことば」	316
5. 日本語／言葉／ことば	317
6. 「自分の日本語」の可能性	318
6. 1. 「差異」の感覚から「自分の日本語」へ	318
6. 2. 日本語を通じて感じる自分の可能性	319

7. 「自分らしさ」への探求・探索	321
7. 1. 「自分らしさ」とは何か	321
7. 2. 日本語教育における「自分らしさ」への注目	322
7. 3. 「判断・価値基準」、そして「規範」としての「〇〇らしさ」	323
7. 4. 「自分らしい」と感じることは	324
7. 4. 1. 感じる日本語を自分のものにしていく	324
7. 4. 2. 「本当の自分ではない」「自分らしくない」と感じる時	325
7. 4. 3. 「自分らしい」と感じる言葉の意味	326
7. 5. 「可能自己」の概念から考えた「自分らしさ」とは	327
7. 5. 1. ありたい自分像	328
7. 5. 2. そうありたくない自分	329
7. 5. 3. そうあらねばならない自分	330
7. 5. 4. 「こうであるわたし」から「そうありたいわたし」へ	331
7. 6. 「自分らしさ」の探求・探索の重要性	332
第4節 「日本語人生」を生きることばの意味	334
1. 「言語の境界」を生きることば	335
2. 「わたし」と「他者」—その《差異》を生きることば	337
3. 場所／居場所を生きることば	338
3. 1. 「今—ここ」という場所を生きる	338
3. 2. 自分の居場所から描いていく「そうありたい自分像」	341
4. 物語を生きる自分とことば	342
小括—境界を生きることば	344
第5章 言語教育としての「自分の日本語」その意義と可能性	346
第1節 日本語教育と「日本語人生」を結ぶ	346
1. 日本語教育と「日本語人生」を結ぶこととは何か	347
2. 「日本語教育」の再定義	349
2. 1. 「ことばの教育」の「日本語教育」へ	349

2. 2. 「ことばの教育」に関わる日本語教師の姿勢	350
2. 3. コミュニケーション教育を能力の育成から「生きること」へ	352
3. アイデンティティに関わる日本語教育	355
3. 1. 「唯一」から《差異》を生きる「関係性」へ	355
3. 2. アイデンティティの両面性	357
3. 3. 言語教育とアイデンティティへの展開	359
第2節 「自分の日本語教育学」への構想	360
1. 「そうありたい自分」へアクセスできる「自分の日本語」を育む	360
2. 「わたし」と「他者」を生きるアイデンティティ	360
2. 1. コミュニケーションで考えるアイデンティティ	360
2. 2. 「わたし」と「他者」を生きるアイデンティティ	362
2. 3. 変化の主体への気づき	363
2. 4. 「自分の日本語教育学」におけるアイデンティティの要素	364
2. 4. 1. 「わたしの枠組み」	364
2. 4. 2. 「能力」と「自己評価」	365
3. 差異を乗り越え、多様な人間関係に気づく	366
4. 「自分の日本語教育学」の展望	367
4. 1. 「日本語人生」と日本の社会をつなぐ「日本語」	368
4. 2. 《差異》を生きる共生	370
第3節 本研究の意義と今後の課題	374
1. 本研究の意義	374
2. 今後の課題	376
2. 1. 「自分の日本語教育学」への展開	376
2. 2. 「自分の日本語」を日本語教育学でどう評価していくか	377
2. 3. 日本語教育における「物語論」への展開	378
3. おわりに	380
3. 1. 物語の語り手として	380
3. 2. 日本語人生を語ることとその場はどういう場であったのか	381

謝辞 .....	382
—「約束の物語」 .....	382
引用文献一覧 .....	382
添付資料 .....	382

本研究は、日本語教育と「日本語人生」を結ぶ、言語教育としての「自分の日本語」の意義と可能性を明らかにすることを目的としている。以下、各章の概要を記述する。

## 第1章 「物語」の始まり

第1章では、本研究の問題の所在、および研究の目的と構成を「物語」の始まりとして記述し、本研究が日本語学習者と私の「日本語人生」の「物語」であることを示した。

一人ひとりがいくつかの出来事を語るが、一つの出来事を他の出来事と結びつけ「物語」として捉える視点を提示し、その一人ひとりの「物語」を一連の「物語」として結びつけたことが「日本語人生」という「物語」であることを説明した。加えて、私とその「物語」を語ることを通じてその一人ひとりの小さな出来事も意味づけをすることが可能であることを述べた。本研究が一人の日本語学習者であった私の経験から出発した事にもよるが、「日本語人生」という「物語」は、実存している人間のドラマであるがゆえに「日本語人生」の意味を巡る私の苦闘と変化の姿が描写されており、その「物語」が何を問いかけているかを絶えず自分に問いかけ、日本語教育の様々な課題に直面させられたのだ。

その上で「自分の日本語」とはいかなるものなのかという問題設定を行った。私の修士論文は「正しい日本語」観の本質を日本語学習者の立場から迫ったこととして意義があると考え、その「正しい日本語」の「日本語」とは日本語学習者にいかなるものであるのかという考えに辿りついた。修士論文の考察において「自分がなくなった」、「自分らしくない」、「自分の本当の日本語」という語りが見られたが、当時はそれを「正しい日本語」という考え方に問題があると結論づけた。

学習者にとっての「日本語」とは何か、そこから研究を改め直していく必要性があると考え、「日本語」を「自分」という観点から捉え直した経緯を示し、語りから得られる「方法」から「物語」に位置づけた理由を人間が、人間を研究する観点から私の立場を述べた。

その上、本研究の目的として、日本語教育と「日本語人生」を結ぶことの意味、言語教育としての「自分の日本語」の意義と可能性を明らかにすることとして挙げた。一人ひとりの「日本語人生」に機能する日本語教育のあり方、また、一人ひとりを支える「日本語」に意味を見出していきたい。人間である「私」が、人間である「彼／彼女ら」を研究する目的はこれに尽きるのであり、日本語教育実践研究者としての私の姿勢へつながる問いであることに違いない。「物語」はすべてここから始まった。

## 第2章 日本語教育におけるライフストーリーへの接近

第二章では、本研究の位置づけ、および「日本語人生」の物語をどう描いてきたか、そのプロセスの詳細を記述した。

第1節では、本研究をどう位置付けるかを示すためライフストーリーとは何であり、どのように扱われてきたかを概観し、続く第2節において、本研究がライフストーリーでなければならない理由、および「日本語ライフストーリー」の位置づけを示した。「日本語人生」の物語は、語られたストーリーだけではなく、語り手を取り巻く重要な他者、例えば、奥さんや友人などの証言や意見が含まれており、私の授業のデータやフィールドノート、語り手のEメールなどが含まれている。また、語り手が「日本語人生」をどのように意味づけているかという時間と空間からなる認識を、日本語を学び始めたときから「今—ここ」まで、という「人の人生全体を視野にいれて考察することは、ライフストーリーという概念があたえてくれる視点」(小林 2000, p.106)であると捉えていることからライフストーリーとして描いていくことに意味があると考えた。なおかつ、「日本語人生」という「日本語での人生」を、あえて「日本語ライフストーリー」とすることで、彼らの人生全体を包括的に描いていきたいという考えを示し、そのような視点に立った本研究が「日本語人生」の物語をどう描いてきたか、そのプロセスの詳細を第3節において述べた。

そして、研究の主体は「彼／彼女ら」と「私」であり、研究者としての姿勢や倫理的配慮が大前提であるとする自らの倫理観を「研究者倫理」として示し、「日本語人生」を物語に書き上げていくためにインタビューのエスノグラフィーを試みた。さらに本研究では、「日本語人生」という物語を通じて、「問題を解く」ということではなく、「問題を発見」していくことが重要であると捉えた意味の「発見 (discovery)」という視点を説明した。第1章で述べた「自分の日本語」という問題設定は、「自分の日本語」とは何かを明らかにすることだけではなく、その中にある「意味の発見」である。従って、野家 (2007) が提示した物語の基本前提でもある誰が誰に向かって語るのか、という「発話のポジショナリティ」(p.11) という側面を重視し、彼／彼女らが(1)「誰に向かって語っているか」、(2)「なぜ語るのか」、そして(3)「私が共感し思いを巡らせるものとは何か」を本研究における分析の観点とした。その上で分析の概念として援用したマーカスとニューリアス (1986) の「可能自己」(possible selves) を説明した。「現在の自己」から「過去の自己」をどのように捉え、「将来どうなりたいか」、「なりたくないか」を予測した自己をも重視し、一人

ひとりが「日本語人生」をどのように意味づけているかを重視し、「自分／自己」<sup>1</sup>を巡る日本語の意味を追っていくことを述べた。また、本研究では40人の語り手とインフォームド・コンセントを行い同意を得たが、個人的な都合でインタビューが継続できなかった語り手は含めず、人生の物語が質的に豊かであると判断した14人の語り手を選定した理由を述べた。その上、「物語」をどのように読んでいき「日本語人生」という物語は日本語を学ぶ人、教える人、日本語で生きる人に向かって語っていることを示した。なお14の物語はStory01からStory14と示し、4組の物語はそれぞれ独立した物語ではなく、14の物語一つ一つが「日本語人生」という物語全体を奏でるものと捉えていることを説明した。

### 第3章 「日本語人生」その14の物語

第3章では、第2章で説明した3つの観点により4組、14の物語を分析、考察した。

#### 1. 〈わたしたち〉その差異の物語

一人ひとりの「日本語人生」に出会ってきた私は、その語りに共感をしたり、驚いたり、悲しんだり、腹を抱え笑い合ったりした。調査を行う「研究者」という立場で彼／彼女らの前にいる私は、「留学生」であり、「外国人」である。ときには「同国の人」であり、アメリカに行けば〈チーナ(chinese)〉と呼ばれるかもしれない「東洋人」である。さらに、彼／彼女らと同じ立場、もしくは同じ経験を有している「当事者」でもある。それゆえ〈わたしたち〉という語られ方をしていると考えた。だが、「礼儀正しいモンゴル人」を語るバトルさん、日本人らしい日本語を話せない日本人であるアキラ君、日本人にならなければならなかった真珠さん、「初めてガイコクジン<sup>2</sup>になった」経験を語るミロさんは「わたし」ではなく〈わたしたち〉を語っていて、それは「差異」を持つ〈わたしたち〉であった。「外国人」、「マイノリティ」、「普通ではない日本人」であるゆえ〈わたしたち〉は〈わたしたち〉であり、一人ひとりの「日本語」の意味も〈わたしたちの日本語〉で語られた。

#### 2. 「わたしの日本語」その変化の物語

トイさんは、日本語との出会いをある日突然訪れた素敵な出来事であり、〈運命〉で

---

<sup>1</sup>本論文では、まず、「自分／自己(self)」と「自我(ego)」を区別する。「自我」は、「自分は〇〇だ」と決めつけることができる意識であると捉える。「自分(self)」とは、「存在の総体、つまり、私という存在全体」の意味として「私」と説明されるときもあるが、「自分／自己」という二つの用語を同義であると判断し説明する場合もある。従って、「自分の日本語」と言った際の「自分」には、存在の総体としての「私」と他者から見られる意識された「私」の意味が含まれていると捉える。

<sup>2</sup> 枠組みとしての「外国人」ではなく、生活の中で感じる「外国人としての自己認識」があると分析された。それを「ガイコクジン」と記す。

あると語った。「日本人の日本語」があり、また、その日本語を目指していた。寝る間を惜しまず勉強してきたにもかかわらず、日本語を通じて自分らしさを見せることができず、抑圧されていると感じてしまった。「日本語」が第4番目の「外国語」であった純は、「おぼんです」という宮城の方言は自分の言葉であり、日本人が使わなくても自分によって甦った日本語は単なる「外国語」ではないという考えに至った。そして、人は「自分らしい言葉のスタイルで生きる」ことが重要であることが純の日本語は物語っていた。また、BLUEさんにとって「日本人の日本語」を目指していたときの自分の日本語は80%であった。「日本人」に生まれ変わることがない限り、いくら頑張っても100%にはなれない。従って80%とは「限界」の意味であった。だが、場面と状況に合う100%の日本語でなくても相手と〈センスのあるコミュニケーション〉ができ、人と関わり合う80%の日本語の意味を見出していた。教室で出会ったエミさんは日本語が上手になりたいと漠然と思っていた。外国語である日本語をどうすれば上手になれるかを考えていたが、自分にとって日本語が上手になることの意味を導き出してからは、何でもできそうな感覚を覚え、「成長」を語る。その「成長」の感覚は、自分の可能性でもあった。「日本語」を巡る変化の物語は、「外国語教育」、「第二言語教育」といった観点での日本語教育の解体が示唆された。

### 3. 「母語」「母国語」「外国語」を巡る物語

中国朝鮮族日本語学習者であるコウさん、秋さん、愛さんの物語は「母語」「母国語」「外国語」という「言語の境界」の意味を語っていた。朝鮮語は韓国語とは少々語彙や意味が異なることもあり、朝鮮語を用いて韓国人とコミュニケーションを行う際に、その意味が通じないときもある。国籍は中国であっても、中国語もそれほど上手ではなく、中国人のような中国語を目指したときもある。そのため自分は「中国人なのか、韓国人なのか」「朝鮮族なのか、韓国人なのか」という狭間で苦しんだ経験もある。しかし、そのどれも「完璧」とは言えないそれぞれの言語を補い合いながら生きる姿も見られた。日本語がただの「外国語」ではなく、一番自分らしくいられたと感じさせる言語にもなるのである。「母語」の次に「外国語」を学んでいるのではなく、すでに、多様な言語を持っていて、自分にとって意味のある言語で生きることの意味が語られた。

### 4. わたしを生きる「ことば」の物語

ジン君、花子、シホさんが語るわたしを生きる「ことば」とは、自分らしく生きるための「ことば」であり、「ことば」を通じてありたい自分の姿を描いていることだと見受けら



れた。また、人とコミュニケーションを行い、関係を結ぶことにより自分が受け入れられたと感じられることであった。そのときの「ことば」が、「意味のあることば」になり、他者との関係を築いていく「ことば」であった。

#### 第4章 「日本語人生」で語られた「自分の日本語」の意味

第4章では、「日本語人生」で語られた「自分の日本語」の意味を考察した。

まず、〈わたしたち〉という語られ方の意味を追い、論じた。「外国人として」、「〇〇人として」、「マイノリティとして」、「帰国子女として」という〈わたしたち〉としてのアイデンティティが強調されると、「自分たち」＝日本人と、〈わたしたち〉という境界が強化され、その中で一人ひとりの関係性ではなく、限定的で固定的な関係性が確認でき、目の前にいる他者を常に「〇〇人」と見なしてしまう。つまりそれは、自分自身を常に「〇〇人」と見なすことでもあり、それがステレオタイプにつながっていたのだ。さらに、「日本語人生」という物語には、「こうである」と規定することがいかに簡単であるかが語られ、彼／彼女らのアイデンティティを固定し限定させ、一人ひとりを〈わたしたち〉というアイデンティティとして意識化させ、序列化につながる事が問題として指摘された。日本語教育において、教えるべき日本語、学ぶべき日本語が「日本人らしい日本語」や「正しい日本語」とされ、その日本語は、具体的で実存的であると考えられた。それにより、唯一で固定的な日本語と見なされ、一人ひとりの日本語は「日本人の日本語」と「わたしたちの日本語」として二分化された日本語に収束されていったのだ。なおかつ、「日本人の日本語は〇〇である」という規範と基準として何の懸念も持たずに語られ、目指すべき教育対象とされたそれらの「日本語」は、実態能力であると捉えられ、コミュニケーション能力への「期待」へとつながった。ところがその「期待」は日本語学習者の「期待」へとすり替わり、いつの間にか学習者ニーズという「常識」となり、それが日本語教育における思想的な問題であることが批判的に論じられた。

さらに、そこで明らかになったことは、その実体のない「日本語」は決して届かぬ思想的な構造であるゆえ、「日本語が上手にならない」と、彼／彼女らを悩ませていた。と同時に、日本語を「外国語」として学ぶ「自分」も唯一で固定的な存在であると認識され、自ずと確固たるアイデンティティが強調されていた。

だが、それらを乗り越えることが「自分の日本語」によって可能であることも確認でき

た。第3節では、「日本語人生」で語られたその「自分の日本語」が、「外国語としての自分の日本語」と「自分だけの日本語」が混在しているが、それらが序列化されているのではなく、横並びに語られていて、そこで可能性が見られたことを論じた。そして「自分の日本語」がいかなるものなのかを考察した結果、「自分の日本語」は「自分のことば」であった。

日本語を自分のものにしていく彼／彼女らは、固定されて確固たるアイデンティティではなく、自分らしさとは何かを探求・探索しながら、アイデンティティを確立していくのであった。そのとき、「自分の日本語」が彼／彼女らを支え、「自分の日本語」によって生き方を見つけられるものであった。さらに、自分にとって「意味のあることば」で生きることとはなにかが示唆された。自分にとって「意味のあることば」とは、つまり「自分の日本語」であり、その自分にとって「意味のある日本語」とは、「わたし」と「他者」が意味のある関係を結んでいくことであり、それを通じて生きる自分がいることへの自覚でもあった。すなわちそれが、自分らしさへの探求・探索の過程でもあったのだ。また、「自分の日本語」を通じてありたい自分像を描いている姿も見られた。日本語が自分にとって「意味のあることば」になる場合、その日本語は「正しい日本語」や「排除と同化」、「差別と差異」で説明される（わたしたち）を乗り越えられる可能性が見出された。

さらに、「母語」「母国語」「外国語」といった「言語の境界」は一様に定義できず、それに対する意識も異なっており、「言語の境界」を生きることの重要性が明らかになった。暗黙の「正しい日本語」や「日本人らしい日本語」は日本語教育においては唯一で固定的な「日本人のもの」であったが、彼／彼女らが語る「正しい日本語」や「日本人らしい日本語」の意味は異なっていて、そこにも意味があった。ここで、誤解してほしくないことは、「正しい日本語」も意味のあることばであったはずだと言うとき、それは一人ひとりが目指してきた「正しい日本語」であって、日本語教育で目指すべき目標として括られてきた「正しい日本語」観ではない。つまりそれらの「日本語」は、実存していないが目標にして頑張ってきた日々に意味があることだ。従って、「正しい日本語」を目指してきた学習者がいて、その日本語が「日本人のもの」ではなく、自分にとって意味にある言葉であることを自覚していけることの重要性とともに、その日本語を「自分の日本語」へと意識化し、本質的な思考へとつなげる日本語教育の必要性が述べられた。

その上、続く第4節において、物語が語る「日本語人生」の意味を述べ、「日本語人生」

を生きる「ことば」の可能性を考察した。「日本語人生」の物語は、人を「〇〇人」と見なすことの問題を問い、「境界を生きる」ことの重要性を述べた。〈わたしたち〉、〈自分たち〉＝「日本人」という線引きは「境界」であると捉えられ、固定化され、本質的だと考えられてきた。しかし、人はさまざまな「境界」を跨いで生きていること、固定的な「自分」を乗り越えて「他者」とつながり、やがて「社会」と「世界」につなげる事ができる可能性が見出された。自分の日本語は「自分のことば」であり、ここでの「ことば」とは「生き続けられる自分を語る力」という意味であり、「わたしと他者を生きることば」でもあった。「日本語人生」を生きる「ことば」の可能性を以下のように示した。

(1)「言語の境界」を生きることば：これは「母語」であり、それは「母国語」である。またこれが「外国語」というように「言語」を別個にしてしまう人の認識をすべて「無」にすることはできない、という事実を否認しない。そのため、そのような「境界」は「乗り越えていく」ことではなく、「生きること」として考える必要がある。それによって、最初は「外国語」であった言語が「私のもの」となっていく。中国朝鮮族である秋さんはどの言語も下手だが「私のもの」と感じている。その感覚は自分の中で自覚的、かつ複合的に育てられる言語、その言語を〈自分にプラスにしていく〉ことができるのである。

(2)「わたし」と「他者」—その《差異》を生きることば：彼／彼女らが語る差異<sup>3</sup>の束は互いに絡み合っている。例えば、バートルさんは「モンゴル人」であり、「外国人」であり、「学生」であり、「男」である。モンゴル人であるが、「ウランバートル」出身であり、学生であるが一家の「大黒柱」でもある。このように「わたし」を規定する幾多の差異は絡み合っていて、「わたし」をどう名乗るかが重要である。従って「差異」を乗り越えることは、《差異》を生きることでしか解決できないと考える。《差異》を生きることは互いを認め合うこと、自分自身がどう名乗りどう生きるかを一人ひとりに帰属することによって「わたし」と「他者」という間を生きぬくことである。そのために必要なのが「ことば」である。「わたし」と「他者」とのあいだの境界は、「ことば」を通じて関係を結び、理解し合い違いを認め合うことができる。「〇〇人」という「差異」から「わたし」と「他者」という《差異》に生きること、「自分の日本語」がそれを可能にしてくれるのである。

(3)場所／居場所を生きることば：ある場所で意味のある他者に出会うことでそこを「居場

---

<sup>3</sup>他のものと違う差違の意味としての差異は括弧を開きそのまま記し、「差異」は、二分化され、序列化された意味としての用いることとする。しかし、生きることの文脈で分析、考察されて意味は《差異》と記し、「差異」とは区別する。

所」であると感じる。「居場所」とは「自分の存在を確かめるところ」である。つまり、ある場所を「居場所」へ発展させることが必要である。自分の存在を再確認出来るときは、自分が受け入れてもらえたと感じるときであり、それは人とコミュニケーションを行い、関係を結ぶことで可能となり、意味のある関係を築くことばでなければならぬことが語られていた。人は人生を生きていく中で、いくつかの居場所を有している。そしてその居場所の中で自分が心地良く過ごせたと感じたとき、そうありたい自分を見つけるのであった。それは一人ひとりが「自分のことば」で日本の社会につながる、つまり他者と関係をつなげることから始まるのである。

(4)物語を生きる自分とことば：日本語を通じて葛藤し、意味のある言葉で意味のある関係を構築している「物語」に出会いながら生きる。それが「物語」であり、「自分のことば」を通して生きていくのが重要であることだった。唯一であるとする人のまなざしと概念をどのように乗り越えるのかは自分が「物語」を語り、変化していく主体でなければならぬことが示唆された。根ざしている固定概念は人と向き合うことによって解き放たれることができ、自分を語ることでエンパワーメントができるのである。語ることで「力」がつく。語ることで「力」になる。語るからこそ自分の居場所を得、自分らしくいきたい自分像を描いていくことになる。従って、「わたし」と「他者」との関係を結ぶためのものでなければならぬ。「わたし」と「他者」の《差異》を生きる「ことば」、つまり、「人間関係」を生きる「ことば」でなければならぬ。「わたし」を語りながらアイデンティティを営む「ことば」でなければならぬ。「ことば」の答えが「日本語人生」で語られていた。

## 第5章 言語教育としての「自分の日本語」その意義と可能性

「正しい日本語」と「日本人らしい日本語」は日本語教育において実態概念であり、実態能力であるとされてきた。しかし、それにより言語は固定的なものであると捉えられ、「日本人の日本語」、「外国人としての日本語」、「学習者の日本語」といった枠で括られてしまい、それぞれの「日本語人生」と日本語教育を断絶させていたのだ。従って日本語教育と「日本語人生」を結び直すことの必要性とその意味について第1節において述べた。

それは、「わたし」と「他者」、「わたし」と「社会」、「わたし」と「世界」を結ぶことである。それは自分がいるその場所にて居心地が良いと感じ、そこからありたい自分像を描いていくことへつながることを結ぶことであることを述べた。そしてそれは「自分のこ

とば」で可能になり、日本語教育はその「ことば」を育む教育でなければならないことを論じた。そして、一人ひとりが「自分の日本語」をデザインして育成していき、自分らしく生きるためにアクセスできる事が重要であること、教育対象としての「日本語」を能力の育成から「生きること」という観点で議論される必要性を述べた。その教育を「自分の日本語教育学」と定義し、第2節においてその構想を提示した。

まず、「自分の日本語教育学」におけるコミュニケーションを「わたしと他者を生きるアイデンティティ」と捉えた。「わたし」は一人で生きているわけではなく、無数の「他者」と生きていて、その中で自分にとって意味のある他者と関係を結び、結ぼうとしている。そのときに「わたし」を語り、「他者」の語りを聞く。つまり「語る行為」とはコミュニケーションであり、それは「人間関係を生きる行為」と定義した。「物語る」こととは「わたし」だけではなく「他者」も同じである。従って、ことばの教育におけるアイデンティティはコミュニケーションで考えるべきであることを述べた。その上で、「自分の日本語教育学」におけるアイデンティティを「わたしの枠組み」、「能力」、「自己評価」とすることを提示した。「自分」を巡る探索や葛藤し、解決を行い構築に向かうというアイデンティティは個人によって異なる。そのとき「わたし」をどう名乗るかは重要である。自分がある他者に会い、自分を語り、その自分もまた「わたし」の前にいる「他者」の物語に織り込まれる。その過程は目に見えないが、それを育むことは一人ひとりが持つ「能力」を通して可能である。日本語ができる／できないといった能力を始め、自分が直面する様々な状況を解釈し、人間関係を構築する能力を持っていて、そのすべては「生きること」で考えるべきであることを説明した。模索し探索していく「力」という能力によって「わたし」は自分自身の現実を構築しながら人生を生き、そしてそれは自分に対する評価につながり、自分の評価基準を上げていく。それはありがたい自分を確立していくことである。(わたしたち)という「普通」ではない自分から立ち上がることで、固定された「自分」を乗り越えられる。「自分」が変わり、世界が変わる。理想のように聞こえるが、(わたしたち)を乗り越えること、二分化、序列化の「差異」から多様な人間関係を生きることにつながるものが「自分の日本語教育」によって可能になることを論じた。その上、「自分の日本語」は自分のことばであり、自分のことばの力は、ことばを通じて自分が変化していく主体であることを確かめられる力になり、現実を構築し、未来をつなげる力になることを「自分の日本語教育学」で実現できる構想を述べた。さらに、「自分の日本語

教育学」は「正しい日本語」や「共生日本語」に変わる概念として、特に、多言語多文化社会、移動と越境の時代においてすべての「ことばの教育」への可能性をその展望として述べた。

第3節では、本研究の意義と今後の課題を述べた。本研究は、〈わたしたち〉が語る問題、〈わたしたち〉を乗り越えることの意味が明らかになり、言説とは別様の当事者の現実に向かった。日本語教育において、曖昧な文脈で語られた「自分の日本語」や「自分らしさ」を、「日本語人生」という「物語」により明らかにすることができ、言語教育としての意義と可能性が見出され、日本語教育がことばの教育として再定義され、どう支援していくかが明らかになった。教育対象としての日本語をどのように捉え、どのように評価するかというのは日本語教育にとどまらず言語教育全体に通底する重要な問題であると考え。そして、日本語学習者の経験や語りに寄り添い、耳を傾け、日本語教育の本質に向かうことが本研究を通じて明らかになり、日本語を「学ぶ」、日本語で「生きる」、日本語を「教える」ということの意味が示唆された。さらに「日本語人生」という自分を物語ることは、現在の「わたし」の人生に意味を付与するとともに、そこから方向性を与えていたこと、自己を語ることで「わたし」を探求し、探索することが「生きること」の上で行われていることが明らかになった。本研究を日本語教育学的論文としての意義があるとすればそこに理由があることを述べた。

ところが、本研究では、「自分の日本語教育学」への構想は始まった段階であるため、具体的なことを示すことができなかった。今後は、「自分の日本語教育」が基盤とする日本語教育が、唯一な「差異」から「多様性」を培える土壌である可能性が見出されたことを踏まえ、「自分の日本語教育学」の理論的な枠組みを確立し、どのような実践が可能であるかを探っていきたい。特に、言語に対する意識化を促す実践のデザインを考えることが課題であると考え。それは、ことばをどのように「評価」するかが、「能力」と関わる議論でもあるからだ。「自分の日本語教育学」を展開していく上で、言語教育としての「自分の日本語」を日本語教育学でどのように評価すべきか、という議論は重要な課題であると考え。「自分の日本語」に対する捉え方は一人ひとり異なり、すなわち自分の言語能力は記述し、規定された客観的なものではなく、一人ひとりの主観的な言語能力意識が重要であると捉える。なぜなら、言語能力に対する意識は、自己評価につながり、その自己評価は自分の可能性へつながったからである。「日本語が上手になることとは何か」という議

論で語られたように、上達したという「能力」は、「成長」の感覚として語られ、それによって自分の日本語が上手になったという「評価」が行われていた。つまり、「自分の日本語」をどのように意識するか、どのように評価するかは、「自分の日本語」に対する主観的な言語能力意識によることが重要である。従って、「自己評価」と言語に対する「自己意識」の関係の考察を深めるとともに、それを具体的な実践を通じてどのように提示していけるかを模索する必要があることを課題として述べた。

さらに、「自分の日本語教育学」における日本語は人間の生き方に関わることであり、日本語教育学という学問において「物語論」を展開していきたい。「日本語人生」という物語は、日本語が単なる「外国語」としての概念ではなく、「道具」でもなく、一人ひとりを支え、ありたい自分像を見出せ、生き方につながることであることが明らかになった。つまり、「日本語人生」という物語が日本語教育的な新たな視点と方向性を与えてくれたと考える。ことばの教育である日本語教育は、人間教育に関わっている。「物語」で明らかになった「自分の日本語」は「わたし」と「他者」、「社会」、「世界」をつなぐだけではなく、世代を乗り越え、歴史をつなぐものでもあった。そのような「自分のことば」を持って生きることは、まさに「人間の生の営み」(齋野 2003)であり、「人間」の生き方と変容に関わる日本語教育の可能性でもあった。従って、人間が、人間を研究する視点に立ち、日本語教育学という学問において「物語論」の意義と可能性をさらに展開していきたい。

最後に、物語を生きる「人間」であり、教育に関わる「人間」であるからこそ、検証のための裏付けで、語りを使用してはいけないこと、方法に先だった研究になってはならないこと、人間の「ライフ」に関わる研究は誰でもできるが、誰にでもできるわけではないことを物語の語り手である私が、読み手へ贈る言葉として述べ、論を閉じた。

#### 【引用文献】

小林多寿子(2000)「二人のオーサー ライフヒストリーの実践と呈示の問題」好井裕明・桜井厚(編)

『フィールドワークの経験』せいか書房,101-114.

齋野克己(2003)「物語ることの内と外—物語論的人間研究の教育的核心」矢野智司, 齋野克己

(編)『物語の臨界「物語ること」の教育学』世織書房, 3-25.

野家啓一(2007)「物語論の可能性」宮本久雄,金泰晶(編著)『シリーズ物語論 1 他者との出会い』

東京大学出版会,1-23.

Markus,H. & Nurius,P.(1986). Possible selves. *American Psychologist*,41,954-969.



## 早稲田大学 博士（日本語教育学） 学位申請 研究業績書

氏 名 鄭 京 姫



(2012年 6月 18日 現在)

## 学位論文

1. 日本語学習者が語る「日本語人生」から「正しい日本語」観を問う 2006 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文

## 学術論文

1. 鄭京姫(2005)「一人ひとりが自分の色や考えを出せながら気楽に話しが出来る風土—実践研究「総合活動型日本語教育」から—」『言語文化教育研究』2, 早稲田大学日本語教育研究科言語文化教育研究室, 105-117項
2. 三代純平・鄭京姫(2006)「「正しい日本語」を教えることの問題と「共生言語としての日本語への展望」『言語文化教育研究』5, 早稲田大学日本語教育研究科言語文化教育研究室, 80-93項
3. 広瀬和歌子・尾関史・鄭京姫・市嶋典子(2010)「実践研究をどう記述するか—私たちの見たいものと方法の関係—」『早稲田日本語教育学』7号, 早稲田大学日本語教育研究科, 43-68項
4. 鄭京姫(2010)「日本語教育における「正しい日本語」観の内実—学習者が語る「選択」に注目して—」『日本文化研究』35集, 東アジア日本学会, 409-429項
- 5. 鄭京姫(2010)「二分化された日本語」の問題—学習者が語る「日本語」の意味に注目して—」論文誌『リテラシーズ』7号, 1-10項
- 6. 鄭京姫(2011)「日本語が上手になること」を目指す教育から「自分の日本語を育む」教育へ—授業実践を通して身られた学習者の「日本語」観の変化から—」『日本教育研究』20, 韓国日語教育学会, 143-158項
- 7. 鄭京姫(2011)「言語の境界を生きる—「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識から—」論文誌『リテラシーズ』9, 31-40項
8. 鄭京姫(2012)「過去—現在—未来をつなぐことばとアイデンティティの意味—「日本人らしい日本語」が話せない日本人である僕の物語—」『ジャーナル移動する子どもたち—ことばの教育を創発する』3, 49-72項

## 著 書

1. 鄭京姫(2011)「自分らしさを規定するもの—<わたし>を語るひとりの日本語学習者のライフストーリーから—」細川英雄(編)『言語教育とアイデンティティ』春風社, 159-178項
2. 鄭京姫(2012)「「自分の日本語」が育まれる日本語教育の必要性—日本語が上手になりたいある学習者の変化から—」M.V.Lakshmi, Hideo.Hosokawa, P.A.George(編著)『Japanese Language Education: A Bridge between LANGUAGE&CULTURE 日本語教育: ことばと文化の掛け橋』Northern Book Center, 107-136項

## その他

## 《学会発表》

1. 鄭京姫(2006)「日本語教育における『正しい日本語観』を問う—学習者が語る『日本語人生』から—」(口頭発表)早稲田大学日本語教育学会2006年秋季大会, 2006年9月9日, 於・早稲田大学(日本・東京)
2. 鄭京姫(2007)「学習者が語る日本語ライフストーリー研究の意義—ナラティブインタビューの方法を中心に—」(口頭発表), 早稲田大学日本語教育学会2007年春季大会, 2007年3月24日, 於・早稲田大学(日本・東京)



- 3. 鄭京姫(2007)「『いま』, 『ここ』を生きていくための『選択』—日本語学習者が語る『日本語ライフヒストリー』から—」(口頭発表), 第20回社会言語科学会研究大会, 2007年9月16日, 於・関西学院大学(日本・大阪)
- 4. 鄭京姫(2008)「学習者が語る「僕の本当の日本語」の意味—日本語教育における「コミュニケーション能力」への期待との関連から—」(口頭発表), 2008年度日本語教育国際研究大会, 2008年7月11日, 於・釜山外国語大学(韓国・釜山)
- 5. 鄭京姫(2009)「「日本語」から「自分の日本語」へ—学習者において「日本語」の意味変遷が示唆すること—」(口頭発表), 2009年度日本語教育国際研究大会, 2009年7月15日, 於・ニューサウスウェルズ大学(オーストラリア・シドニー)
- 6. 鄭京姫(2010)「「自分の日本語」が育まれる「場」としての日本語教育の必要性とその意味」(口頭発表), 日本・韓国・北東アジアセンター国際言語教育セミナー, 2010年3月13日, 於・ジャワハラル・ネルー大学(インド・ニューデリー)
- 7. 鄭京姫(2010)「「日本語が上手になること」を目指す教育から「自分の日本語を育む」教育へ—授業実践を通して見られた学習者の「日本語」観の変化から—」(口頭発表)韓国日語教育学会第18回国際学術大会・シンポジウム, 2010年12月11日, 於・培花女子大学校(韓国・ソウル)
- 8. 鄭京姫(2011)「「言語で生きる」—「母語」「母国語」「外国語」をめぐる葛藤やアイデンティティの揺れを乗り越えて—」国際研究集会, 2011年3月6日, 於・早稲田大学(日本・東京)
- 9. 鄭京姫(2012)「「中国朝鮮族日本語学習者が語る「言語の境界」の意味」(口頭発表), 韓国日本学会第84回学術大会, 2012年2月4日, 於・同徳女子大学(韓国・ソウル)
- 10. 鄭京姫(2012)「自己評価につながる言語能力に対する意識・気づき—複数の言語環境で育った二人の日本語学習者のライフヒストリーから—」(口頭発表), 第11回日本語教育学会研究集会関西地区, 2012年3月10日, 於・京都外国語大学(日本・京都)
- 11. 鄭京姫(2012)「教育対象としての「自分の日本語」の意義と可能性—自分のものにする工夫と過程における「正しい日本語」を手がかりに—」韓国日語教育学会第21回国際学術大会・シンポジウム, 2012年4月28日, 於・建国大学校(韓国・ソウル)

#### 《研究会発表》

1. 鄭京姫(2008)「「日本語学習者は、語るべき物語を持っている」—ライフヒストリアンとしての私が、その「日本語人生」に出会ってから—」(口頭発表), 早稲田大学質的調査法研究会, 2008年11月20日, 於・早稲田大学(日本・東京)
2. 武一美・古屋憲章・金龍男・鄭京姫・埴誠一郎・長嶺倫子・田邊裕理・村上まさみ・寅丸真澄・山内薫(2009)「それぞれの実践研究—「考えるための日本語」初級から上級まで—」(口頭発表), 第2回ことばと文化の教育を考える会, 2009年2月20日, 於・早稲田大学(日本・東京)
3. 鄭京姫(2009)「学習者が語る「自分の日本語」とはいかなるものなのか—学習者の「日本語ライフヒストリー」から—」(口頭発表), 第3回ことばと文化の教育を考える会, 2009年3月11日, 於・北京外国語大学(中国・北京)
4. 鄭京姫(2012)「私はどのような教育実践をめざすのか—自分の日本語を日本語教育学でどのように評価できるか、という問いに変えて—」(口頭発表), 第10回言語文化教育研究会, 2012年3月3日, 於・パリ日本文化会館(フランス・パリ)

#### 《研究助成》

##### (研究代表者)

1. 早稲田大学特定課題研究助成費「言語の境界を乗り越えることの意味」(2011年度, 特定課題新任, 課題番号2011A-950)
2. 早稲田大学特定課題研究助成費「複数の言語を持つ日本語学習者の言語応用能力と言語意識に関する質的研究」(2011年度, 特定課題B, 課題番号2011B-309)
3. 科学研究費補助金「中国朝鮮族日本語学習者の言語応用能力と言語意識に関する質的研究」(平成23年度~平成24年度, 若手研究(B), 課題番号24720242)
4. 笹川科学研究助成「日本語教師研修のための国際ネット対話プロジェクト実践」(平成24年度実践研究部分, 研究番号24-812)

# 研究業績関連説明書

■以下に、研究業績書の中の規定の3本について、それぞれ400字以内で要旨を書き、博士学位申請論文との関連について説明してください。

## 論文1 「二分化された日本語」の問題—学習者が語る「日本語」の意味に注目して—

### 【要旨】

本研究は、一人の学習者が語る「日本語」の意味に注目し、その「日本語人生」を追ったものである。その結果、言いたいことがあっても言えず、悩んでいるというコミュニケーションの問題が指摘された。特に、コミュニケーションにおいて自分らしさを感じることができない「二分化された日本語」の問題が明らかになり、日本語教育において「自分の日本語」という概念が必要であることが示唆された。

### 【関連】

本論文は第4章の第2節の「二分法により説明される日本語」の一部にあたる。ここで得られた示唆で、日本語教育における「日本人らしい日本語」の内実を問い、「自分の日本語」という概念がなぜ必要であるかを続く第3節において検討した。

## 論文2 「日本語が上手になること」を目指す教育から「自分の日本語」を育む教育へ—授業実践を通して見られた学習者の「日本語」観の変化から—

### 【要旨】

本研究は、学習者が「自分の日本語」をどのように捉えているのかが見られ、なおかつ、その「日本語」についての学習者各々の意識の変化が見られた実践の報告から、「日本語が上手になる」ことの意味、日本語教育の目指すこととは何かを論じたものである。学習者が見出した「日本語が上手になること」には、学習者が感じる「成長」の意味が語られていた。また、日本語学習者には、あるときは「外国語としての自分の日本語」、あるときは自分の気持ちを表せる「自分だけの日本語」が混在していることが明らかになった。そして、「自分の日本語」を育む日本語教育の必要性が示唆されている。

### 【関連】

本論文は、第4章の第3節の「自分の日本語」とはいかなるものなのかに関連し、第5章の「自分の日本語教育学」の構想につながるものである。実践の分析からのもので、論文において実践そのものは取り上げていないが、「自分の日本語を育てることの意味」、成長と自己評価につながる「自分の日本語」の意義と可能性への示唆を得た。

## 論文3 「言語の境界を生きる—「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識から—

### 【要旨】

本研究は、「母語」「母国語」「外国語」をめぐる中国朝鮮民族日本語学習者の言語意識をライフヒストリーインタビューから聞き、考察を行ったものである。そこには、3つの言語に対する葛藤やアイデンティティの揺れが語られていた。しかし、その揺れを乗り越え、そのどれも「完璧」とは言えない互いの言語を補い合いながら生きる姿も見られた。さらに、「言語の境界」を生きること、「自分」にとって意味のある言語で生きることの意味が語られ、ことばをアイデンティティの観点から捉え直すことの必要性が示唆された。

### 【関連】

本論文は、第5章の言語教育とアイデンティティの展開につながる。また、自分らしさの探究・探索の重要性、「言語の境界」を生きることばの意味、「わたし」と「他者」その《差異》を生きることばの意義と可能性が明確になったものである。